



野槌

下二

僧
775
231





花は流るるよ月かく戸に
 雨もむらして月をこひし
 ぬもなげなれはこめて
 梢ありあをまよふ庭を
 音のま塚ごよよぬた
 やくあさよふ家れが
 てもどもうせりい
 事くは花のちりり月乃
 いかり事あれごとく
 枝かの枝ありあがり
 のる芽は事も始
 情も花よよをさるる
 今いんほり
 くれ男女の
 くれ男女の



あゝうひさりのぬくあぬてこしを^{さし}巻り
きてぞあひはく一車もるのりて海が
つらそありからし物ぞまじりてつらりさぬ
まは又さるんまてこしひておりぬさく物とのみ
みじとまらりなりて都の人おれぬ一氣おれ
ハ^{子なり}睡ていともるんわくを海くまりいまづうに
しらわ人のうらうらありやをさ海ありともまよ
びか^いはれどつらさるんとする人もおれ何と
なく^{アサヒ}葵をうつしてありてさよめおれれ
わやどまのひとまら車もる床もきとうれ
かまらまど思ひよすれハ^{ウレカ}牛飼^{シキ}に^ガ顔あはれぬ
まらもありわくもさるくもくもはれ

くよれいふもはれくもさる言のほ
まはきそるくはり車もはあくるみ井のり
人もつらりつらりん^ハ花をまされ成
て車もおれぬうら^ハもまみぬれハ^{スレ}麓^ハ
足もつらりひ目おはらび^ハなまあり
ゆく^ハそせの^ハあ^ハ思ひ^ハあ^ハま^ハさ^ハる^ハれ
ハ^ハ結^ハる^ハら^ハう^ハ祭^ハる^ハら^ハま^ハあ^ハれ^ハ夜^ハ棧^ハ敷^ハの
おをあらりふ人のる^ハも^ハら^ハう^ハあ^ハま^ハい^ハ有^ハま^ハ
ありぬ世の人教もあ^ハの^ハい^ハわ^ハぬ^ハぬ^ハに^ハう^ハい
人^ハさ^ハる^ハせ^ハる^ハん^ハの^ハら^ハり^ハ我^ハ方^ハお^ハぬ^ハぬ^ハよ^ハま^ハ定^ハつ^ハら^ハり
と^ハ女^ハ程^ハあ^ハく^ハ結^ハつ^ハけ^ハぬ^ハハ^ハ大^ハなり^ハ器^ハ水^ハを^ハ入^ハ
て^ハほ^ハる^ハた^ハあ^ハか^ハと^ハり^ハも^ハい^ハん^ハに^ハあ^ハる^ハも^ハは^ハ車^ハ一^ハと^ハ

くれしとふもさしこしとらまをくめりぬは
厨がそつぎぬて一都の中よかぬと人志をさる
目かまぐらに一日ふ一人二人のみをらんやち都
野舟園りくね登ふも送る教ねるる目を
あれどさくね目かぬこれ権をひきくもの
作らしてうちさく程なりしうさいほまうがは
よまめもようば思ひひをぬい死期也言ふまで
あぐれまよちねあうさく不思議也あひくも
世とねらうまい思ひるんやゆくあさそらよもの
と双六の石と作りてさそるさるはほいこ
らまん事しづれり石もあさくもかぞく
あさくひしつとねねまいうねおいのぐれぬとん

まやまをさふれいほきまぬさけりやまの
まもろがまごりまはり兵好軍よみりな死
みりり記事と知て家をもりそれもはまさる
世とそひりりあは席よふ閑も水ねまてあえ
ひてまをよあよあま思ひりいひあけね
あつらるる山の奥を帯ねる記さひひまうは
らんやま死よろぞり事いささね珠もまめ
るにねね

花いありり
けりは句のねまなまのけり花あさりり月
く南を記とるるのまあさす花の未罪れ
時もちりりま記とほも月のままも秋も風ぬ

の味もろりよんあへさくあり
蔡君謨吉祥寺探花詩花未全開月未圓看花待月
思依然明知花月無情物若使多情更可憐蒙菴云
二未字有意此是花月之開情也花月無情猶能動
人之感觸所謂多情却被無情惱之意

く満ありと 沙海よ河の字曲の字とあり
たれにめて たまこめてまのり帯もあなまに
待し梅もうつろひよあり
歌は詞くさ 亦は不席也
くくありか人 禎の字あり
新事も 月花のまあすよ月花と

いひて下に男女の事といひんとてかくせぬ
詞つてさよ
わしとれはわしとれはわしとれはわしとれは
男女のたまけも 是より女好むといふと
たまけお色けりお色のおさけあさきと也
をきく雲井と わしとれはわしとれは雲井とぬ
ともうしり月のおらありあふまそ
望月は 十五夜の月とよ
謝希逸月賦美人邁兮音塵隔千里兮共明月
唐李峤百詠三五二八夜千里与君同
白氏文集三五夜中新月色二十里外故人心
曉ありくありて 古今席秋の月とろりよあり

つよは雲よあはれ

まへて月記をい 莊子駢拇篇吾所謂聰者非謂
其聞彼也自聞而已矣吾所謂明者非謂其見彼
也自見而已矣 遵生八牋五云水樂洞雨後聽泉
杖 輩豈無耳哉更當不以耳聽以心聽

去ハ家と云あつて

山谷詩春去不窺園黃鸝頗多語

月の如ハ園のうら

杜甫詩今夜鄜州月園中唯獨看

あつてめもさず ころめもさびよそめもせめて

まのりあり 大井河岩浪たつ 杖士よ筆は

紅葉にあつてめもさず

泉めは 李義山秋風景花上曝視清泉濯足

祭るき油 賀茂の祭あり

核者不用ありとて 糸はるるを約知と核

あつて店る車一不用ありと云也

あつてさひけつこのわりて 奥なる屋より

核者ハ御ハ紙さだまとのかゆ也

みやこの人のたつをせりて ゆゑあつて善悪

もたつて詞也爰にていなり詞也

あつてひつをわつて 賀茂の祭は白あふひと

くはるあり

きつてく 義乗ハ義也

くそなつてはる車 足物の車あり

既うろりしき みざれりしき也

源氏夕影ユヅリカホよりうろりしき オホチ人物モノのまじり

しそくあり

まざれたるみも サシジキ 板敷イタジキのまじり

世のまじり オホチ 余オホチのまじり オホチ 世のまじり オホチ 威セ

衰スのまじり オホチ 世のまじり オホチ 威セ

大勢オホセとみざるこそ オホチ 足物オホチ 群集オホチのまじり

とぞく オホチ 我オホチもまじり オホチ せん也

あうり オホチ 源語ゲンゴ類聚レイジュ云巨オホチ等オホチのまじり

大なる器オホチの水オホチを入 オホチ 漏刻ロウコクの水オホチは皆漏オホチりはく

海オホチ不能オホチ實オホチ漏オホチ危オホチ オホチ 後漢書オホチ王符オホチ傳オホチ山林オホチ不能オホチ給オホチ野火オホチ江

一日オホチ一人オホチ二人オホチのまじり

神代卷上云伊弉册尊オホチ曰愛也オホチ吾夫君言如此者オホチ吾

當オホチ益オホチ救オホチ汝所治國民日將千頭オホチ伊弉諾尊オホチ乃報之

曰愛也オホチ吾妹言如此者オホチ吾則當産日將千五百頭

多都野 オホチ 上をよみ

舟墨

西オホチり歩オホチ舟墨オホチ汝オホチをオホチ乃オホチはオホチ汝オホチ救オホチうオホチひオホチてオホチ者オホチ人

よ君オホチをオホチりオホチはオホチり

ひオホチつオホチまオホチとオホチひオホチさオホチくオホチもの

淮南子オホチ 鬻棺者オホチ欲オホチ民之疾病オホチ 鬻賣也

孟子公孫丑オホチ矢人オホチ惟恐不傷人オホチ函人オホチ惟恐傷人オホチ平匠

亦然故術不可不慎也オホチ注 巫者為人祈祝利人オホチ生匠

者、作為棺椁利人、死、趙岐注云巫欲祝活人匠梓匠
作棺欲其蚤售利在於人死也

和名集云棺音官一音貫和名比止岐音比止岐取以盛屍也

海くみふと

二一三五二二四一一三一ニニ一

あひ黒白はふとをくべてかぐへて十はあふると除也

すぬき、脱字家とすぬきとむむ住家よとふ

川抜の義をり

水もどしてあそび

唐田遊岩隠箕山高祖幸其門曰先生此佳否答曰臣

泉石膏肓烟霞痼疾

糸すきぬれは乃葵あううなりと成人は

巾簾をり紙をれをりゆりうあまなく

あまゆりうとよき人のあまゆりうあまなく

よまゆりひりうと周防内侍

かたれはもつひなま物なりあまゆりうあまなく

あまゆりうあまゆりうあまゆりうあまなく

あまゆりうあまゆりうあまゆりうあまなく

あまゆりうあまゆりうあまゆりうあまなく

あまゆりうあまゆりうあまゆりうあまなく

あまゆりうあまゆりうあまゆりうあまなく

あまゆりうあまゆりうあまゆりうあまなく

あまゆりうあまゆりうあまゆりうあまなく

鴨長門の四季物語

四季あり

くら玉 公事根深云五月五日節會天皇武
 注殿よ出仰なりて宴會を行はれ群臣に酒
 と所也内弁あども四節も向一人の湯あや
 めはうづうをかく日けのあつうはうと典茶
 寮あやめ乃はくみとまの群臣に茶玉とあ
 小色乃のいとを以てひらにこれの悪鬼とま
 とり本又作り 荆楚歲時記よ長命縷
 續命縷にあふもこれなり
 枇杷皇太后文 昭宣公女朱雀院母后穂子
 作るぬ糸と 千載集 弁乳母
 高蒲常洞の玉ぬ糸と作るぬ糸と

づう糸と作る 七 江戸は玉ぬ糸とあや
 めはあふもこれ 後野のあはれ相やあ
 漢野の寝殿よをさる也 あやめるよあは
 作り作るぬ糸と作るぬ糸と作るぬ糸と
 きよぬぬ糸とのあはれ新拾遺にも載り
 記あはれ枇杷の皇太后文がこれと作るぬ糸と
 作はの作りと作るぬ糸と作るぬ糸と作るぬ糸と
 作るぬ糸と作るぬ糸と作るぬ糸と作るぬ糸と
 作るぬ糸と作るぬ糸と作るぬ糸と作るぬ糸と

あつらひたる物もよきぬ人のりて奥なるもの
ありきやうは物もよきありきん

松のぬ家 唐詩鼓吹よ李賀五粒松は秋作
ふとあり五葉は松あり

酉陽雜俎世言松五粒者粒當言鬣自有二種名鬣
皮如鱗甲結實多新羅多此種

八重松 一葉院の山所なるは八重松は人
のちりきりて沖あふゆりれはまむと海
りてあふまのゆりれはまむと海
いしのをは松の八重松は五重なる白ひたる
邦

吉野乃花 古今席春好のこころは山の

松の人磨うんめい雲うくのこころんえりる

左近はさくく 内裏に左の松右近は橋を

うややう 異風并あり

新らけこらきり 新らけは傍の字也はきり

角きき也万葉をうや見まかしの二松

てやにもかきも福り宗人邦

こら多し 事印也こらきり

暁松 暁松と書 玉荊公詩山櫻抱石

狀松枝比並餘花開最遲只有春風嫌宗實吹香

渡水報人知此詩と本集よる山松と歌をり

余芳備祖にハ松桃の部及入り

生き梅 東坡詩二月驚梅晚幽香此地無

京極の入后 風雅集十五定家々はあうはみ
 くの家のまがりてま入てやどくゆけるあり
 かのまづううてゆり梅の本枝よむすひ
 けをく 永福院の侍 ますきか宿を
 昔はゆりてかりぬ折は句は梅のえ
 七十一 新大納言考世 くらみゆかうはれ
 瑞梅もえも又うりつとまを結
 卯月がりのわうらで 杜牧詩霜葉紅於
 二月花もひ或は又新緑勝花をむゆふん
 うり
 池ゆる蓮 謝靈運庐山入て東林の池を
 垢蓮とてうり蓮と賞するものおるれも

こゝにうりあるさうの周茂新あり
 めぞうに物あり 愛さく物也と云義也
 きらかり 桔梗也 古今物の名は秋らう
 雪のぬよりり白き花をむるも秋といりあり
 あり
 志とた 紫苑也 ほとむと云也
 われもう 小ぢらるる云前也と云説あり
 むきくの霜枯れみ くれはかり秋と云
 とらり句ひありあり 桜衣
 月今よ菊有芙蓉花とあれは菊むい芙蓉な
 り瓜正色と云

河やう ちいさな川も河海に細く并ぶ
 かしめきいたる名 奇位の草を愛し植て
 沖津も知らずの日本草にもんごるんや
 りりおろしきつらいつめくさこもやれども海石
 榴ハ博望が西域に使しこよりま種と名あり
 中国よりいらする韓退之王元之を吟詠せし
 しもあつて海棠の海外より来りてあれど
 楊妃の睡もきりくつり嵩山の思惟樹を西天に
 貝多也唐人の詩より貝多文字古く作まり戎
 王子八月支那の花の名也杜老が詩より万里戎王
 子の作まり又字書にも傳せぬらん樹木
 を植ふる事も杜詩よあれありや

乃銘して財殖多事ハ智者のそげりや也よ
 うぬ物さくりに置るるもほいさくよさ物さん
 とよめらんさくさかーさくさくおわらるゆ
 口程一紙にそえめたるものどもあて跡よ
 あささくひつらさゆあーほいされからんさす
 物あつたつららんさくさくさくさくさくさく
 てうかひらん物さあさめさかひらもたぞそ
 あささくさく

ころりさくさくさく ころりさくさく也 又事外也
 前漢書韋督及子玄成俱以明經至相諺曰遺子黃
 金滿籬不如教子一經 山谷詩遺金滿籬常作災

庵徳公居峴山之南平生不入城府刘表问曰先生不肯受官禄何以遗子孫曰世人遺之以危我遺之以安後漢書

古人の賢なり者いさめり者もくま一家の倭石
れ多くしる事にして美談とん唐元載胡樹
八百石晋石崇錦步障六十里ありし
一して益かありき伏波將軍財を親族
故帥よりほごして世の人のあつたけり
守銭乃奴ありとある誠よやごしき志なり
ト

悲田院亮蓮上人の俗姓は三浦のあぶらり
やまうらちと武名也おんは人のあつたけり
よりすして吾妻人こそよひつる事いたのま
これ那の人をあやうきのこよくと實か
ソひを難うれいさうそおほまめともどれ
ハ都みえくほてなれてんゆりみ人のん
とほりくはひゆらるてんやううま
怖あつめ人のつらむどの事をやまこいさひ
うさくあえひひるれんよはくことうきし
は偽んとい思ひのこもあくるれぬ人の
あれいさあつちいあうぬ事おがうと
あづり人の我ういされけぬい人のあれく特

とくればひきくはきくよりなるものなればいふにめ
よりいかにせしむてやむぬあまのひひゆるれ
と人あはれよの戸はくぞうしやあはれしむ
こそこけひびくし声うらなみありく
て程教のこまやうなることりりいひわさま
どもやとろひひく一々の一言のなましく成て
ねんうらあらまらともほつちくわくわくや
きくはありてその益もあつてこそとえは

悲田院 拾芥中末云在鴨川西畔施藥院別所也
養孤子病者也 延喜左右京職式云凡京中之路邊
病者孤子仰九ヶ條令其所見遇随使必取送施茶
院及悲田院

けうるに 無双 志をさるるふゆの也

吾書人 異本あつたものゆゑとあり

もうさハ 極者也

日本武尊 東征の時 橘姫海より死を尊

ゆりより 孫ふたて 東より 橘姫の事

とろひが 吾孺やまのひひより 東を

あつたふ 日本に ゆれも 喉が 和名

文選を 引て 意鄙を 引つて やまひと あれば

東方より くる こと あり くれと 大さハ

関東を 引て あり

聖ろれ 聖ハ 堯蓮也 くれり 堯蓮

此卷 詞を あり

さしていざしと人をあむじつさあ〜いよれおこ
りけいやくを西とやめ氏をさそて農とま〜めじ
下に利あ〜んこ物いあ〜う〜ぞ衣食為
考なりう〜ふび〜と〜ん人とう謀れ盗人
と〜い〜の〜さ〜

論語不以人廢言又子貢曰君子一言
以為知一言以為不知言不可不慎也

左傳韜茂字然明晉叔向如鄭然明從收器者立
於堂下一言而善叔向曰必韜茂也下堂執其手
以上曰子如不言吾幾失子矣
荒夷於 ぬふに回念人也

禮記雜記下孔子曰少連大連善居喪三日不怠

三月不解期悲哀三年憂東萊之子也注言其生
於夷狄而知禮也

子放にしてそ前ありれど 池の底は楸杓と
たまけ然谷り敷威を多きん〜すりも我
るは〜と紙思ふゆ〜也父子の底を天倫をれ
をれ〜ありれと思ひ〜ん陶淵的が一刀と
や〜ひ我子の〜と〜送りて汝り薪水此分を
〜と〜く是も又人の子也よく過せ〜と〜
は仁愛の底也されば子〜して父母のんとうを
て子のん〜せばな〜つ〜孝も多〜たれゆれど
不來字子以事父未終也といひ子と思ふ
〜〜おやを〜〜つ〜身養も無〜〜さ也

成て少ひ百姓と子のこしく愛さばなりとす

これおさまるべし

ぬきみをもつて

後漢書吳祐順帝時遷膠東侯相祐政惟仁簡以身
率物吏民懷而不欺番夫孫性私賦民錢市衣以進
其父々得而怒曰有君如批何怒欺之促飯伏罪性
慙惧詣閤持衣自首祐屏左右問其故性惧述父言
祐曰掾以親故受汚辱之名所謂規過斯知仁矣使
飯謝父仍以衣遺之

人恒此産ありて

孟子梁惠王上篇曰無恒産而有恒心者惟士為能若民

則無恒産因無恒心苟無恒心放辟邪侈無不為已及
陷於罪然後從而刑之是罔民也焉有仁人在位罔民
而可為也是故明君制民之産必使仰足以事父母俯
足以畜妻子樂歲終身飽凶年免於死亡然後駝而之
善故民之從之也輕黎民不饑不寒然而不至者未
之有也

人きりてぬきみ

家語云歎窮則攬鳥窮則喙人窮則詐 論語

小人窮則無所不至

凍餒 孟子盡心篇所謂西伯善耆老者制其田里教
之樹畜導其妻子使養其老五十非帛不煖七十非肉

不飽不煖不飽謂之凍餒文王之民無凍餒也老者
北之謂也

それ書をよみたりと學ひしる人の義理を知故
よ飢寒を力よせすれども忍事とせざること
恒々ありと云うやう此人の百千人が中にはまれ
也大方此人の困窮よ乃ぞみそい僻事ともし
ぬをくともさゆ也されば王者乃政の人の飢寒
をぬやうよする也耕作とほらめあじまは暖
の飢をぬぐれ桑麻とて拵る布帛おほき
ゆへは膚体の寒とをせぐ山林川澤氏と利
を日くくして一人の私とせざゆ所の材木も
ありくくして産食とほらりやまぐ鳥獸は

肉くよに走るくす農人の私と上中下も定
めて田島とあづけてよく作りせまわぬに
肩あともりくよを氏の恒の産と云也君よ
りめ此氏をめぐみ書ふ所を飢寒を憂る
衣食よ事くくして教とせぬれ禽獸は動
きくくくくに異れ産す是よりりて人倫の
父子君臣夫婦兄弟朋友は五典を教て孝悌
忠信とありくくしてむも也人間の最はは五の物
乃くありは及を行ふ理は本より人の心中よ
ありんか一して君よ對しては忠とひひ又
母よ對しては孝と云是仁義の本心也よく是
を知所の勤て善とせしめて惡とはどのづ

此のゆゑに紀也是般人教者乃及也先と王道
と名づく堯舜の政孔孟の道也皆也公
く者也世嘉(君)くらくして乃たこれを見る
乃ち百姓恒(恒)は産なくして一日の飢寒(飢寒)は
ゆぬれざるもして況や父兄はは妻子
と考ふづき事をやけなく或はつり曲り
て密(密)とて或はつらよ晝夜と分るず
人を教へぬれども亦何なり然も貧(貧)
き者の憂(憂)は若くむむの必定して不害か
富(富)ものも尚何者(何者)も事(事)のいづれも不害か
れどもよく心とほきてみまはるれ不害か
せざるれは罪(罪)ありの罪(罪)ありふとて是
より

より下(下)のゆゑにいおす(いおす)利(利)をむさぼる
ゆゑに貧(貧)き者(者)の心(心)も若(若)く富(富)る者(者)
も安(安)穩(穩)なるも若(若)く此(此)をて國家(國家)に治(治)するも
こと(こと)も目前(目前)の及(及)理(理)ありんあらん君(君)教(教)者(者)乃(乃)
と行(行)ひて國家(國家)と治(治)めん文(文)王(王)の我(我)師(師)也(也)とい
はるるめか

人(人)は終(終)焉(焉)乃(乃)其(其)所(所)の心(心)をて事(事)を
人の心(心)を治(治)するもまた深(深)くして心(心)を治(治)す
心(心)を治(治)するもまた深(深)くして心(心)を治(治)す
おとすなりつひに

梅尾の上人と云ふは、河をて馬あはるふ
をのこあしつとくひくたの上人まらりてあふ
さうとや宿務開教の人哉、阿字くく唱らそ
やあやなる人の出るぞ、あまらうとく、えの
ふかき島にたれ、府生殿の沙馬めんと答りり
こいれぞ多たれ、阿字本不生もそあふれ
うまきく夫縁をもし、けりねそ感涙を
のこられあらしめ

梅尾の上人 明也上人なり 高辨也

梅と梅こりといふ、りりやあ山の僧雪村
諱友梅梅尾といひりて、い山の名、我諱の字也
こつり事、岷岷集よのせり、湖海新聞よ

梅とよめ、名はくとも、阿の梅梅相通、とん
ん

元亨釈書五釈、高辨姓、平氏紀州在田郡人、父重國
常為嘉應帝衛兵曹、九歳従高尾山上覚、讀俱舎頌
十九、従真然、稟兩部密法、自爾止北山、梅尾盛唱、賢首
宗寛喜四年正月十九日、唱弥勒号、而宗年六十

宿務開教の人、前生して修練して、功徳の
開教して、今阿字と唱らと也、又自然發得
あり、云事もあり

府生殿、職原下云、左右近衛府府生、大將判授、
大納言、大將不召、社府生、大臣大將以上、召加府生也、又
左右衛門、左右兵衛、も皆府生ありと

阿字本不生 大毘盧舍那經有情及非情阿字第
一命又云我覺本不生 新羅國雪妙寺僧不可思
議狀云秘密中秘教者阿字自說本不生
阿字字と翻るる人無不非の三義あり 炳現阿
字素光色さるる八識田中下阿字一乃生死亦
斷 溫繁亦斷さるる密家此常談也
馬は是と阿字さるる府生と不生と字をせし
上人の身感應れりありあり

沖野身秦重躬小面此下野入道信長と落馬の
おある人也能くはるるさるるさるるさるる

まゝかゝるるさるるさるるさるるさるる
死すさるるさるるさるるさるるさるる
と人思つりさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるる
おとおをさるるさるるさるるさるるさるる
りり明雲座主相若くさるるさるるさるる
此難やあるさるるさるるさるるさるる
まゝさるるさるるさるるさるるさるる
のをさるるさるるさるるさるるさるる
かくおをさるるさるるさるるさるるさるる
おみのさるるさるるさるるさるるさるる
あさるるさるるさるるさるるさるるさるる

箭^ナよありてうせひひかり

嘉永二年天倉座より雲傍正と法住寺に由り
振替し然り十月十九日本為義仲兵と率し
法住寺敷と賣やうり傍正も馬よ業そ遁ん
流ひらると本為が大将楠六郎親忠が放夫よ此
腰骨を射ちせそ貞送よ落流ひまもあがり
然りけり親忠が席等落重て此頭ととり
威裏記三十四のんこり
それ相の周於叔服戦國の唐拳漢の呂公許員が
類より世にゆるり貴賤のあり其
力よより吉山れきけり掌とくはらぬ麻衣道
若人相伝とありり衣志徹の古今識鑑と撰ふ

きりりり若福あかふ若負賤なり若夫死の若
刑傷若若盜賊の若りつれも主因説と記し類
例と舉りりり然孔子形陽虎も似て虞舜
頂相重腫一様若看とるりりり此時ハハ術必と
さつらびおと海より人あまるとりきど呂東萊り
特議よつり趣誠よ吉今若公論也今此版は明雲れ
とつり左氏傳は六鶴退飛ハ風吹故りり宋の
襄公は何の祥も吉山れかんと叔與よられ然れ若
向とと流りり法湯のこもハ若れ為よ流りりりり
明雲れつり兵仗の都やありりりりハ乞も何と
語りり也襄公ハ好む年軍もやれ明雲ハ終り
流夫よありり 此版明雲座より此版と別版

二二けつる本あり

齊治の^{キウヂ}よ^{キウヂ}ハ成^{キウヂ}ぬ^{キウヂ}ハ^{キウヂ}事^{キウヂ}の^{キウヂ}格^{キウヂ}あり^{キウヂ}と
リ^{キウヂ}の^{キウヂ}事^{キウヂ}あり^{キウヂ}と^{キウヂ}人^{キウヂ}の^{キウヂ}心^{キウヂ}も^{キウヂ}あり^{キウヂ}也^{キウヂ}格^{キウヂ}式^{キウヂ}あり^{キウヂ}も^{キウヂ}
る^{キウヂ}す^{キウヂ}と^{キウヂ}也^{キウヂ}

格式 嗟^{サガ}哉^カと^{キウヂ}皇^{キウヂ}の^{キウヂ}時^{キウヂ}弘^{キウヂ}仁^{キウヂ}格^{キウヂ}弘^{キウヂ}仁^{キウヂ}式^{キウヂ}と^{キウヂ}撰^{キウヂ}む^{キウヂ}
法^{キウヂ}和^{キウヂ}と^{キウヂ}皇^{キウヂ}の^{キウヂ}時^{キウヂ}貞^{キウヂ}觀^{キウヂ}格^{キウヂ}貞^{キウヂ}觀^{キウヂ}式^{キウヂ}と^{キウヂ}撰^{キウヂ}む^{キウヂ}也^{キウヂ}
武^{キウヂ}德^{キウヂ}律^{キウヂ}式^{キウヂ}令^{キウヂ}貞^{キウヂ}觀^{キウヂ}律^{キウヂ}令^{キウヂ}格^{キウヂ}式^{キウヂ}
永^{キウヂ}徽^{キウヂ}律^{キウヂ}式^{キウヂ}令^{キウヂ}格^{キウヂ}垂^{キウヂ}拱^{キウヂ}式^{キウヂ}格^{キウヂ}新^{キウヂ}格^{キウヂ}教^{キウヂ}頒^{キウヂ}格^{キウヂ}

留^{リウ}司^シ格^{キウヂ}周^{キウヂ}元^{キウヂ}前^{キウヂ}後^{キウヂ}格^{キウヂ}令^{キウヂ}式^{キウヂ}格^{キウヂ}式^{キウヂ}律^{キウヂ}令^{キウヂ}事^{キウヂ}類^{キウヂ}等^{キウヂ}也^{キウヂ}
名^{キウヂ}と^{キウヂ}の^{キウヂ}也^{キウヂ}と^{キウヂ}り^{キウヂ}我^{キウヂ}の^{キウヂ}物^{キウヂ}乃^{キウヂ}律^{キウヂ}令^{キウヂ}格^{キウヂ}式^{キウヂ}之^{キウヂ}唐^{キウヂ}國^{キウヂ}の^{キウヂ}と^{キウヂ}言^{キウヂ}ひ^{キウヂ}て
作^{キウヂ}ま^{キウヂ}り^{キウヂ}唐^{キウヂ}書^{キウヂ}刑^{キウヂ}法^{キウヂ}志^{キウヂ}云^{キウヂ}古^{キウヂ}之^{キウヂ}為^{キウヂ}國^{キウヂ}者^{キウヂ}議^{キウヂ}事^{キウヂ}以^{キウヂ}制^{キウヂ}
不^{キウヂ}為^{キウヂ}刑^{キウヂ}辟^{キウヂ}懼^{キウヂ}民^{キウヂ}之^{キウヂ}知^{キウヂ}争^{キウヂ}端^{キウヂ}也^{キウヂ}後^{キウヂ}世^{キウヂ}作^{キウヂ}為^{キウヂ}刑^{キウヂ}書^{キウヂ}惟^{キウヂ}恐^{キウヂ}不^{キウヂ}
備^{キウヂ}俾^{キウヂ}民^{キウヂ}之^{キウヂ}知^{キウヂ}所^{キウヂ}避^{キウヂ}也^{キウヂ}其^{キウヂ}為^{キウヂ}法^{キウヂ}雖^{キウヂ}殊^{キウヂ}而^{キウヂ}用^{キウヂ}心^{キウヂ}則^{キウヂ}一^{キウヂ}蓋^{キウヂ}皆^{キウヂ}
欲^{キウヂ}民^{キウヂ}之^{キウヂ}無^{キウヂ}犯^{キウヂ}也^{キウヂ}然^{キウヂ}未^{キウヂ}知^{キウヂ}夫^{キウヂ}導^{キウヂ}之^{キウヂ}以^{キウヂ}德^{キウヂ}村^{キウヂ}之^{キウヂ}以^{キウヂ}礼^{キウヂ}而^{キウヂ}可^{キウヂ}
使^{キウヂ}民^{キウヂ}遷^{キウヂ}善^{キウヂ}遠^{キウヂ}罪^{キウヂ}而^{キウヂ}不^{キウヂ}自^{キウヂ}知^{キウヂ}也^{キウヂ}唐^{キウヂ}之^{キウヂ}刑^{キウヂ}書^{キウヂ}有^{キウヂ}四^{キウヂ}曰^{キウヂ}律^{キウヂ}令^{キウヂ}
格^{キウヂ}式^{キウヂ}令^{キウヂ}者^{キウヂ}尊^{キウヂ}卑^{キウヂ}貴^{キウヂ}賤^{キウヂ}之^{キウヂ}等^{キウヂ}數^{キウヂ}國^{キウヂ}家^{キウヂ}之^{キウヂ}制^{キウヂ}度^{キウヂ}也^{キウヂ}格^{キウヂ}者^{キウヂ}百^{キウヂ}
官^{キウヂ}有^{キウヂ}司^{キウヂ}之^{キウヂ}所^{キウヂ}常^{キウヂ}行^{キウヂ}之^{キウヂ}事^{キウヂ}也^{キウヂ}式^{キウヂ}者^{キウヂ}其^{キウヂ}所^{キウヂ}常^{キウヂ}守^{キウヂ}之^{キウヂ}法^{キウヂ}也^{キウヂ}凡^{キウヂ}
邦^{キウヂ}國^{キウヂ}之^{キウヂ}政^{キウヂ}必^{キウヂ}從^{キウヂ}事^{キウヂ}於^{キウヂ}此^{キウヂ}三^{キウヂ}者^{キウヂ}其^{キウヂ}有^{キウヂ}所^{キウヂ}違^{キウヂ}及^{キウヂ}人^{キウヂ}之^{キウヂ}為^{キウヂ}惡^{キウヂ}
而^{キウヂ}入^{キウヂ}于^{キウヂ}罪^{キウヂ}戾^{キウヂ}者^{キウヂ}一^{キウヂ}斷^{キウヂ}以^{キウヂ}律^{キウヂ}

いりゆけ人よりなれ双よりなれ
也天下は物の上より下にも如く不堪の事あり
下は瑕瑾ありきりれども人々のきき
はくきとをたひて救済せられ世の事を
よそ人の所より事法なりきり

能くはかん 藝能也

うらつく ゆいあり

世固るなりきり 一為世の時よりき義也

つまれくすにて 強弱強弱 ありきり

藝能よりきりてき義なり

天性より骨 せられよの器用也

なりきり 泥よりきりてきりぬ也

堪能 藝能よりきり器用なり

法け 法の長きなり

不堪 けりぬ義也 器用なりと云

瑕瑾 二字よりきりて器用なり

事 ことあり

乃ちなきなり 法なりと云り也

放持きり けりぬ義也

世はけを 情よりきり世の物なりと云也

善法法師の光明堂なり 藤子也 沙門よりて唯

識と云ふもきりて器用なり

いりくはきりてきりて器用なり

て凡のこきりてきりて器用なり

けきいひのく之藏サウとありたり又明詮メイセン法師ホウシ九真寺クワンコンジ
めて法相とゆふま性コトにふくして寺テ成ナリ出デらんす
雨滴ウラキ此庭コノニワおほねとらちてくぬつら成ナリてかくやう
うあり地の極キョクてくるた物モノとらうのまじくまやとを
すかりの祇房キフウふりり年トシひきくまて法相ホツゾウ宗ソウ
の名とありたり昔物コトモノありふ人ヒトありあり一ヒト
いかり地チらんを道ミチに丸マルとこたりたり何ナニも或人オクヒト
芥カイと名ナとこく若ニヤあり何ナニのちうくく針ハリもある
ありと名ナふ人ヒトふかやうのちもああり
吾ガうらけくます下シタよおれとて入都ニヤウくうり学ガク
官カンして終ハシメ持チ士シ成ナリまおとすりけりく名ナのく
云クニ傳デン氏シ善珠ゼンジュ明詮メイセンありとく儒家ニョウガはらん
あふびとよくせんはなごう物モノとふらん

或人乃云年トシむ午ウマ又マタなりまでとらりりり
らん徳トクとら捨シテくも也ナリら第ダイか智チとら末マタも
老人ロウジンの事コトとら人もえりくもす成ナリま
あひまくくんごうく大オホく前マエ乃ナリ志シらざいやめて物モノ
あるくそめやまくあねまの第ダイれ世俗セキヨ乃ナリ事コトもを
づきりりて生涯カイヤとくは下カゲ愚グの人ヒトなり麻マく
是コトくむ事コトハ字ジび字ジもも教キョウと志シらかハ是コト東ツカ

れうをいしてやむべしゆゑなりゆゑにふくし
やまんのやうなり事あり

一わ十にありきと

論語子罕篇後生可畏焉知來者之不知今也四十五
而無聞焉斯亦不足畏也已

大戴禮脩身篇曾子曰年三十四十之間而無藝則無
藝矣五十而不以善聞則不聞矣七十而未懷雖有微
過亦可以免矣

ゆゑかゝるおぼろしくいふは 志意のゆるゆる思ふ

ふいせ

おぼろしくいふは 不審くおぼろしく

ふいせ

は後者たむりきとてさうさうの意とすそふとつら
維もさうさうのやうなれども高適は六十にしてけ
りて詩と學ておぼろしくいふは後者泉は六十
けりて學問と文章の名と詩とあり詩のみた
りて師曠が教ふありさうさうの物と出りて
中年ありては終日中を行き 老ては獨
りて後行がしきまふはさうのゆゑなり
詩云は不努力老大徒傷悲いふありん若かり
はさうさうの老るるもさうさうの老るる
ゆるん老るるもさうの早六十にしてはさう
事なき物をいひしき事いひしきに及て
さうさうの教誨なり

静然上人

西園寺内大臣

實衡公也左府公衡公男

又竹林院と号す

資朝卿

権中納言従三位檢非違使別當後

醍醐天皇の時此人也日野俊光卿乃三男

老ゆりやひして

在りて競の字をりやひを

よめり

けふおれさうとく又え作とて

内府は給

ゆり八年前よりさる所也老より若うなりとを

又ゆりさるはひひくむも老よりとて内府

戯もして下つてさるもけりや

上巻にありる舟師と唐の物に似ありとのふり

もありこれハ唐人の詩より右池の中樹に

故月下門僧の杖船月籠出曉堂雲林下

乾經秋苑森溪を掃葉夕陽僧をんと

つらもみ分僧と高聲辨あり也又朝

鮮國ハ沙門あり形甚矮小して新

似たりこれハ人清は沙門と雜僧とト云

うと慵齋叢詠よりあり

考兼大納言入道りーこれハ武士ともうら團

とてハ波野ハわたり年ハ資朝ハ一条ハ

ふりよとこよとてあが浦山一廿四あらん
只あかくそり戸りたれもいれけ
る

為兼大納言 昆沙門堂と号す

定家 為家 為教 為兼 推大納言正二位

應長元年依勅撰進玉葉集正和元年奏覧

日二年十月十七日判發日四年十月廿八日

左使としてたれ依後(流罪せり)公卿補

任とてたり或説は為兼依後始に流せられて

和方三十三首と後阿弥陀佛とて不宗と後

棟をたつといは後り是よあてて教たてて嘉

元二年内治とて風雅集為兼末の由り

りたにやそ河と後りたりは後り

やそ川といはるる名あをなるまん

く後一まのあはとありは

六波羅 小宗家あ人の一族と京都にわき

畿内西園の政と行とて是とあ六波羅

と号す東鑑に詳あり

あがうとやゆ さいとてうそちりとも地

ゆあさるゆのあがうとやま 一時のち

は後おあれりてはる資財のてあか

うとやまといはるんといはる 只よ小宗氏

鎌倉に居たり帝王とてみ 幼雅と立て

將軍とてと力ありてはる 國家とてはる

年久し我邦是れ居し君と延喜天曆乃
時の一々一わ衆をわらげしころづる國政と
うんともふれし甲も名力死してともなうと
るれりしなまを遂に敵と又かきんりのとと
あつた内しと為悪いせしりんとあひもかくあ
原るゆき事ありては是資朝のふのこ
こころあつてくる也と氣かき禁の石乞り
事成る那不成而烹固其職也ころひ前漢乃
主又僊が大夫夫生不五鼎食死即五鼎烹
取しと一はんありて又荆通漢祖は向て
下下乃英雄これ帝れ出り而とせんもあつと
しよはよよりて見れは資朝も又お衆よりとく

きんとあふるなり
ちり此豊臣大將れいし筑あはちらし時
依久前玄者といけりて車よのを京は出
とわしとれは玄者人よりりてわき軍に
は筑前ちをぬききんとあひりしよを也かの
資朝も後醍醐の密謀は居也とく資朝は
そられお衆よりひしとて依後一流され
らるしとてきしと不便の事あり

世人素ち乃門しあややうきしとわりける
このものあつたりわらうらふも福らぬみ

如斯夫不舍晝夜程子曰此道体也天運而不已日
往則月來寒往則暑來水流而不息物生而不窮
皆与道為体運乎晝夜未嘗已也

真俗

古ハ出世間俗ハ世間あり

去之れて後六韜云春道生万物榮夏道長万
物成秋道歛万物盈冬道藏万物靜盈則藏々
則復起莫知所終莫知所始

秋とくふひ

下くく海水と秋とくふ

原くくむくく泉れ子くくくく

小春

四季ハを瓜四季次ありゆへ四季と云也

節序と云も是なり

下より上も未くは論語瞻之在前忽然在後

れきおひひ

程子曰今夫海水潮日出則水涸是潮退也其涸者已
無也月出則潮水復生却不是將已涸之水為潮水自
然能生也余安道海潮圖序古之言潮者多矣或言
如橐籥翕張或言如人氣呼吸或云海鮑出處皆亡經
據唐世盧肇著海潮賦以謂日入海而潮生月離日而
潮大自謂極天人之論世莫敢非予嘗東至海門南
至武山且夕候潮之進退弦望視潮之消息乃知盧
氏之談出於臆臆所謂蓋不知而作者也夫陽燧取
火於日陰鑑取水於月從其類也潮之漲退海非增

減蓋月之所臨則水往從之日月右轉而天左旋一日周
照於四極故月臨卯酉則水漲乎東西月臨子午則潮
平乎南北彼竭此盈往來不絕皆繫於月不繫於日
何以知其然乎夫晝夜之運日東行一度月行十三度
有奇故太陰西沒之期常緩於日三刻有奇潮之日緩
其期率亦如是自朔至望常緩一夜潮自望至晦復
緩一晝潮若因日入海激而為潮則何故緩不及期
常三刻有奇乎肇又謂月去日遠其潮乃大合朔之
際潮殆微絕此固不知潮之準也夫朔望前後月行
差疾故晦前三日潮勢長朔後三日潮勢極大望亦
如之非謂遠於日也月弦之際其行差遲故潮之去來
亦合昏不盡非謂近於日也盈虛消息一於月張陽

所以分也夫春夏晝潮常大秋冬夜潮大蓋春為陽
中秋為陰中歲之有春秋猶月之有朔望也故潮之極
漲常在春秋之中濤之極大常在朔望之後此又天
地之常数也昔竇氏為記以謂潮虛於午此候於
東海者也近燕公著論以謂生於子此測於南海者
也又嘗問於海賈云潮生東南此乘舟候潮而進退
者耳右今之說以為地缺東南水飯之海賈云潮生
東南亦近之矣今通二海之盈縮以誌其期西北二
海所未嘗見故闕而不紀云嘗候於海門月加卯而
潮平者日月合朔則且而平緩三刻有奇上弦則午
而平望已前為晝潮望已後為夜潮此皆溟海之候
也遠海之處則右有遠近之期月加酉而潮平者日

他亦入侍者ありつらるるをそのよせかけきても
如流の事不そとわり中が美ありとて

大匠の大譽

大匠の官は任さう新時

郷の應あり

宇治左大臣殿

宇治の忠左衛門頼朝公保元

の礼ようれはひぬえは知足院白忠實

公は二男法性寺笑白忠通公の弟也

東三條殿

拾芥中末云四條院誕生所成重

明親王家より

二條南町西南北二町忠仁公家貞

仁公大入道殿

傳領長久四年晦日焼失

筆をさしれは物さしれ楽器をさしはるをさして人こ
わりの盃をさしれは酒をさしひりいをさしれはさう
うん事とさしふんは必事とされをさしかりもも
不善は戯をさしとさしあはさしゆは聖教れ
一句をさしはゆささく新法ありさし年
しして多年は非をさしさし事もありあり
小い曲はみさしひりげさしゆさしけさし
らむや先刻ありさしおの益ありさし又小おさし
どもも佛おありさしとさしとさしとさしとさし
急りうらなも善業をさしつさしとさしとさしとさし
たふありさしとさしとさしとさしとさしとさしとさし
定るさしとさしとさしとさしとさしとさしとさしとさし

りうむかざれい内鏡のめくは鏡之を升て不
伝と云べしはあふさし是と云うと母へ
等と云れハ 異中ハ梨葉より下と茶器
と云え茶をさるとんと思ひ盡と云れハ酒と
のまんと思ひさいと云れハ双六と云ふ
ありふとあり

陳師道思亭記云目之所視而思後之視于父思嗣
視刀銘則思懼視廟社則思敬視第家則思安

攤ダうンとと相ム 韻會定韻攤他于切手
布也增韻用也按也又廣韻攤蒲四敷也集韻亦
書作攤ト 鮑宏博經意錢者何兼天纂文曰訖億

一曰射意一曰射教即攤錢也

李濟翁資暇集錢戲有每以四文為一列者即史
傳云所意錢是也 俗謂之攤錢亦曰攤鋪其錢
不使置狀欺惑也疾道之故謔其音々攤為蚕訖
及音鋪為蒲厥義此耳今人書此錢戲率作標
蒲字何貶標蒲其甚耶案標蒲起自老子今亦
為呼盧者不宜雜其号於錢說攤鋪義較然可
見 杜子美愛州歌長年三老長歌裡白晝攤錢
高浪中箋註曰攤錢蜀人賭錢之名後漢梁冀
傳少好意錢之戲注引何兼天纂文說億一曰射
意一曰射教即攤錢也

大鏡師輔云此傳はたゞを説くあり 双六の事

と云くはんり

不善於戲と詩云善戲謔兮不為虐也

聖教 經海等と云

暫此字也白地とも云り

率尔 論語注率尔輕遽之見

繩床 梵網經よ菩薩十八物のうちあり

李白草書哥行宣州石硯墨色光吾師後倚繩

床 謂懷素

事理ゆくり 心こころと理こころ

と事とて事と理と成別として一偏と著

たりとハ理障事障と云てきこも也事理不二

ゆくりのハ各家の論也外相不肖内證必熟と

之も心信於此常談なり

盃にうこををけり事ハいづくゆゑと或人の為

うせ珍ひしと救當とゆりハうこハありと

とつるもやん疾とゆりハいづくゆゑと

道也流を乃こしてはけつとこころはとるがなり

とてはけつと

救當 韻會當了浪反底也韓子玉卮無當註

無底也

魚道 下学集云魚道建殘盃也以餘瀝洗盃痕

喻之魚過旧道故曰魚道也魚雖游泳大海終不忘

平家物語の類ありり海ありりぬ河ありり
勅解由小路二品禪門 世尊寺行忠也

ひろくありり 平張

薄摩たたく 薄摩ハ梵語也梵燒ハ鬘を梵ハ

たくと云ハ重言なりなり也梵ハ水也梵ハ

水を重復抄月 河伽ハ水也梵語して河伽

乃水と云ハ摩訶ハ大の梵語して摩訶大迦葉

白んといりり

法深寺 赤山志河谷道あり

拾芥下本云清閑寺佐伯公行建立

花のさうりり々々を至りり百の十日也も何正は海
七月と云いりりど云去よりり七十九日おやうをり

りり

時正 彼岸は中日と何正と云成僧家は況

龍樹菩薩の礼をひきと都率天の側り 霊

所臺ありりここに樹ありり二月花開七日七夜

而落秋八月七日果成摩醯首羅梵天帝釈等

名集りて七日之間世間善人悪人の名と市記

も生死此岸涅槃彼岸故曰宜取七日修善業い

ゆは春秋七日也此事たうりぬや砥平房

録よ彼岸八日本の風俗也唐土よあれあり

いりり

遍照寺は承化法師池の寺と日外ふひつけ
て堂乃うち下てえとまゝにたてた寺なりとの事
これいふもあつては入らざりしはなとのれも
りりていそこめてらるるはこころをゆるよそ
かひいひどろくくすくすく草かりり
すて人ふはむきまの村名とのことおたひて
入てるる大雁もあつたあり中に法師
まじりておあせ福らこころは法師を
らうへてはより使殿へ出らるりこころ
石の寺と頭よりけりて杯獄をいふり基
後大納言別当の時よあん侍りたり
遍照寺 拾芥云廣澤僧正造地 僧正ハ寛朝

寺ありは寺嵯峨あり
使廳 檢非違使廳也別當あり職原あり
基俊 久我の門基具の二男也
沙門の罪とい大方終るあつては近代の
弊法也僧尼令とて訓戒を密たり石晋高
祖ハ佛像よくもの云と云ひおれて法氏を迷
僧徒を誅し唐乃李徳祐ハ甘露寺ハ常住物
を訴は沙門と罪し柳渾を家よ放火せり偽
を刑を棠陰法事ハいふあり

太衝乃太の字息うつらふ事一陰陽はな

あはれ下は人の都の人よ交りみやあはれ人高貴
あはれめても紙をそよ本寺本山をそねれぬ
顕密乃僧あはて我俗よあはれぞしそ人高貴
りれるぞらうらう

我俗 我風俗をりり一かよ属は字とくきると我
族類をりり

人高貴いよあはれあはれわらわらるるよまの白め若佛
と作りてまはあはれよ金銀塔むはるるをい
そみ堂をそんすりよ佛ありまはと
まらてよよ安置をそんや人のあはれやみ
やども下より流るる事 雪のこころうらう
いよあはれらうらう事 甚多

雪佛 負和集子元雪佛頌一華發出一如未出

團々咲映用識得觸躰元是水聲耶宮裏不投胎

子元ハ佛光國師祖元也又雪達磨雪布袋とあはれ

雪めて其像を作りたり

又張文潛戲作雪獅絶句六出粧成百獸王日頭出後便

即當撐眉拄眼人誰怕想汝應無熱肺腸

雷とて獅子とはなりしなり
安曇 二字もふとくもいひ也佛とて
とくといふ
は辰雷佛のころ金剛院の六崎莊子が
菌蟪蛸のたぐいのなり

一道理よりさつ人ありぬたむしりなりぞ
みそ春うがなるしうまふかくよとふは
物をとらひし人もある事帯のころなれ
よふわりくえゆる也あぬ道れ浦山あな
ふあかうやまぢとあうはげりきんと

いひてありるん我智とより出て人みあり
角つもの角とてあけ牙あるもの牙と
るんといひし人もある事帯のころなれ
物をとらひし人もある事帯のころなれ
あり大なる失也品のころなれ才藝のころ
よりあても先祖の巻も人もはつちあり
りふ人といひし人もある事帯のころなれ
肉もよそこころのころありはてしとわ
る也とていひし人もある事帯のころなれ
をもまねくは慢なり一及にも律法
なり人のつらあつらよ非とあるは志帝
又湯とては物り代るしれ

あゝぬ道の 我々よりぬあり
 角ありもの 牛羊はさかひ 虎狼猶大の
 しくふもさひのこゝろ也
 昔よやくは 上をよるなり
 呉のちさく 佐品のしりき也
 うこけくのしりか 若干は罪あり也
 をこにもみく 嗚呼とあり 世俗よ忘れもの
 るんと云義なり
 いひきされ いひけり也 深武帝を究
 深氏名のこゝろ けいひけれは
 おががた
 志常よるるして 異本よるるして

とあり 曲禮志不可滿樂不可極

年老より人の一輩すれはり 才結ありては人
 のほみ 誰よりやんあどいつあけいさなりか
 どそいさるもいつづきさかハアまきど
 うれすれはり 徳のあはれ 一生け事よそ
 みたりは 信をきく 名ゆ今いそれになり
 いひてありれん 大方いあり 毎そなり
 いひちり せらるるなり のたよあゝあや
 をのつゝあやまらもあゝぬ 魚一ゆふりあも
 辨へあゝびたどいひいり 友なるはまき

程冬去氷須泮春來草自生請君觀地理天道甚分明

遠國必そむく 論語遠人不服則修文德以來

之既未之則安之 注内治修然後遠人服有不服

則修德以來之亦不當動兵於遠

夙よあつり 本草序云真誥曰常不能慎事上

者自致百病之本而怨咎於神靈乎當夙卧濕反

責他人於失覆皆痴人也夫慎事上者謂舉動之

事必皆慎思

その化 法化也

禹のゆきて 書大禹謨帝曰咨禹惟時有苗弗

率汝徂征禹乃會群后三旬苗民逆命益曰惟德

動天無遠弗届禹班師振旅帝乃誕敷文德舞干羽于

兩階七旬有苗格蔡氏傳云三苗國名在江南荆揚之

間特險為亂者也

わうきく時く血氣うらよあまうりん物ようこきて

情欲たつり力とあやあめくくけんま事理

とまうりしり又似りり義器とこりて室を

ほいやくしををを茶の枝めやつもつさあは

ふさうりのて物あそひんち軸うやみの

じお日よあつりてまあやうり情よめて行と

いさきよあつりて百年は力と得り命と大つり

瓶云為君一日恩誤妾百年身

あましくとろそかして 年よりてハ枯れおと
ろへ氣血淡薄にして物ハ感動する事ト云々

小節小節が事一さめてゆびくるもぞおの
ころさゆハお造りて又まゝとありけ又法外が
おろりといふ洗われど言燈大師の法作は目錄
めいせり大師ハ承和のりよりたされ終り
小節うろりちり事一まほのこもやるは元
おね

小節小節 友今節小節小節をうの衣色
姫乃流ありありなるやうにそはよくは
いりよれをうかのやまおあるふはありは
ぬこをうれりてはありて

中院准后親房古今節小節小節事不
知ぬ仁明天皇承和の法乃人出羽國郡司
女國也無双の人也或洗ハ弘法大師法は
しめゆふお造りてはありては玉はあり
小節と云者お形をれやうりては充
暮ころさゆとゆははくしめゆはり也然
而小節玉造其姓者別の上他人より云事
無款いさゆにもおねは沈淪して奥州の

方カタとして令シ我ガを歎カ実サニ方カタ物モノは下シ句クの時トキは物モノの
月ツキは月ツキの穴アナより落スは生ナマむクありたるをみめて
らりの言コトはさうしむもち也ナリ小コ所トコロ思オモひつゝの言コトは
業ノリ平ヒラと名ナてよあり文フミはそこの言コトは太ヒに
非ヒ章シヤウが書ツキくぬ時トキはさうして後ノチ京キヤウ朝チヤウ約ヤク
り解トクふ成ナリける時トキはさうしむひねまこの言コトは
文フミを康ヤス秀ヒデの河カハ楳ヒ下シ時トキ果ツクてくやう云イハ
時のむま平ヒラあり

吾ガ名ナは抄セウ云イハ業ノリ平ヒラ物モノは下シ句クの時トキは物モノの
月ツキは月ツキの穴アナより落スは生ナマむクありたるをみめて
らりの言コトはさうしむもち也ナリ小コ所トコロ思オモひつゝの言コトは
業ノリ平ヒラと名ナてよあり文フミはそこの言コトは太ヒに
非ヒ章シヤウが書ツキくぬ時トキはさうして後ノチ京キヤウ朝チヤウ約ヤク
り解トクふ成ナリける時トキはさうしむひねまこの言コトは
文フミを康ヤス秀ヒデの河カハ楳ヒ下シ時トキ果ツクてくやう云イハ
時のむま平ヒラあり

あの上ウヘ句クと涙ナミはり思オモあり秋アキ風カゼの吹フクつぎを
もあめりくはりよあやしく思オモてく思オモて
あつて思オモておは文フミは人ヒトを多オホく死シ人の
つうべ一ヒトありやくる物モノ程ほどもさうよかのぞ
くは月ツキの穴アナより落スは生ナマむクありたるをみめて
らりの言コトはさうしむもち也ナリ小コ所トコロ思オモひつゝの言コトは
業ノリ平ヒラと名ナてよあり文フミはそこの言コトは太ヒに
非ヒ章シヤウが書ツキくぬ時トキはさうして後ノチ京キヤウ朝チヤウ約ヤク
り解トクふ成ナリける時トキはさうしむひねまこの言コトは
文フミを康ヤス秀ヒデの河カハ楳ヒ下シ時トキ果ツクてくやう云イハ
時のむま平ヒラあり

玉タマ造ゾウれ小コ所トコロと小コ所トコロと人ヒトの思オモひ物モノは

人々がはつたまにさうしてあつたひつり
人のさうりゆゑあり

お今十二名のつりもさうさ人のわぎけり日真
河法師のさうりゆゑあり

よみて小町の小町さうりゆゑあり
安信法行の信 信りゆゑあり

よと人さうりゆゑあり
よと人さうりゆゑあり

孤心はあつたさうりゆゑあり

顕彰古今抄、真静善祐法師弟子也善祐密
通千條后者也、是異説也

お遠と云ふ 玉造小町子仕表書云予行路に次

歩道之間徑邊途傍有一女人容貌憔悴身体疲瘦
予問女曰汝何御人誰家の子有父母哉無子孫歟

女答予曰吾是倡家之子良室之女焉壯時恇慢最
甚衰日愁歎猶深云 又繁ぬる思也

法行 安信法行は三善法行と云ふなり三善
法行ありと云ふ世に善相と云ふこれあり淨苑

貴所の父也と文章にも多く本物文粹にもあり
築道は達者也寛平延喜の法の人也

方野大師 弘法大師也大師附法傳并九尊釈
書第一の詳也

は後山所弘法時代前後の事といひ弘法八仁

云ハハ琵琶行ヒハハサウ行も似たり市ノ人間の盛衰セイスイと惜サト
りて佛道ノみらびき入る西ノ大師カキの生死カキ海
賦フ九相クサウの詩シの心シンも似たりヒ又キヨツラ法ホウ約ヤクと云
若モシ善相ゼンサウ云々ハ又キヨツラ文章ブツお似たりやうハ又キヨツラ信シン
以イ人ニ儒者ニョウシャの風フウありて延壽帝ニョウジなり意イ人ニ封事フウジ
をよみたハ佛法フツポフハ世教セイキョウ國政クニセイの爲メありキヨツラ事コト也ナリ
トされまされもまた他の文詞ブンシ諸眼シュガン辭ジをどにも
佛ブツ乃ノと結尾ケツビなりキヨツラありキヨツラありキヨツラハ本ホン信シン法ホウ行ギョウ
又キヨツラ也ナリといひんも又キヨツラ米メをキヨツラ又キヨツラ長明チヤウメイノ書ショ名ナ抄ショウ
玉造タマゾウの小野コノといひて同人のやうありといひて親房シンボウ
の心シンもキヨツラ玉造タマゾウも小野コノも皆ナラ姓セイ氏シなりキヨツラ小野コノと
云々キヨツラ多タ多タといひて同キヨツラ玉造タマゾウ小野コノと小野コノ

小野コノと別人トクニありて又キヨツラ又キヨツラ奥ウチ別ワケとありてトウロ龍リウ巖ガン
乃ノ目メよりありて又キヨツラの生ナマりて又キヨツラと云々キヨツラ抄ショウハ
業ノ平ヘイ也ナリといひ親房シンボウ抄ショウハ實サチ方カタ也ナリと云キヨツラあれ也ナリ
況キヤウナリ

小野コノと別人トクニありて又キヨツラ又キヨツラ奥ウチ別ワケとありてトウロ龍リウ巖ガン
乃ノ目メよりありて又キヨツラの生ナマりて又キヨツラと云々キヨツラ抄ショウハ
業ノ平ヘイ也ナリといひ親房シンボウ抄ショウハ實サチ方カタ也ナリと云キヨツラあれ也ナリ
況キヤウナリ

小鷹にけりし大

史記蕭相國世家高帝曰夫獵追殺獸免者狗也而發蹤指示獸處者人也今諸君徒徒得之獸身功狗也至如蕭何發蹤指示切人也

史記李斯陰刑謂子曰吾欲与汝享黃犬臂羹鷹出上蔡逐狡兔得乎 史記左傳黃犬臂羹

文政十丁亥十一月六日舎砥用郡原町村低寫之
此卷表題誤為野槌上之二下之二也

中村直衛

